
邪神のディープ・キス ~ワンダーランドは眠れない~

雷都

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

邪神のデープ・キス ～ワンダーランドは眠れない～

【Nコード】

N4800Z

【作者名】

雷都

【あらすじ】

舞台は、眠りの世界である【ワンダーランド幻夢郷】と、覚醒の世界である【モト幻滅郷】の、ふたつに分けられます。

ワンダーランドのアリスが生み出した邪神を、モノトニーランドに暮らす高校生の「国広太一（主人公）」が退治する。というのが、大まかな筋です。

邪神を倒すべく戦う太一ですが、彼自身もまた、邪神「クトウル」

の力を秘めていました。

そして、クトウルー（タコ）としての力をすべて引き出すために、ワンダーランドにいた八人の少女と契約しなくてはならないことを知ります。契約の方法は、「女の子とキスをすること」。

かくして、八人の女の子と契約をすることになった太一。人間と邪神のはざままで葛藤しながらも、太一は仲間を守るために、他の邪神と戦うことを決意します。

プロローグ（前書き）

タイトルからもわかるとおり、クトゥルー神話と、不思議の国のアリスを、混ぜあわせたような世界観になっています。

読者によっては、気持ち悪いと思う描写もあるかもしれませんが、ですが、筆者はすべて、エンターテイメントの範囲内として描いています。

閲覧の際は、自己責任でお願いいたします。

おもしろいと思うので、ぜひ読んでください。

プロローグ

人の意識が届かない幻夢郷【ワンダーランド】で、少女の魂がさまよっていた。

眠りの世界では、彼女は何にでもなれた。

万物の根源　少女観念体【アイデア】だった。

彼女は何にでもなれる。それ故に、彼女は何者でもなかった。

偏在しながらも、孤独である少女の魂に、ある男が近づいていく。

眠りの深淵にもかかわらず、男は意識を保っていた。

彼は、少女の魂へ物語る。

明晰夢のように、素敵なお伽話だった。

それは、『アリス』という少女が、不思議の国を遍歴する話。

はじめは警戒したものの、少女の魂は、男の話を食い入るように聞きだした。

しかし。

『アリス』が赤の女王に追われるシーンで、男は口をつぐんでしま

う。「ねえ。それからどうなるの?」

少女の魂は、続きを催促する。

男は答えずに、ゆっくりと手を差し伸べた。

そして、ありったけの可愛さと、わがままを込めて。

少女の魂に実体を与えた。

「物語の結末は、君が見つけてごらん」

再び口を開いた男は、少女観念体【アイデア】から生まれた少女の、名前を呼んだ。

「アリス」

男が去った後。

アリスは、幻夢郷【ワンダーランド】を独立国家にした。好奇心を満たすために、ひたすら不条理な法律をつくった。陽気で愉快的仲間たちと、宴を楽しんだ。

アリスの物語は、ハッピーエンドを迎えようとしていた。だが。

覚醒世界に住む者たちが、彼女の物語を書き換えていく。目覚めたまま、夢を犯した。

アリスに淫らな妄想を押し付けた。

少女の体は、気持ちよくなる道具に変えられた。

幻夢郷【ワンダーランド】は腐敗し、暴力と放蕩がはびこった。

それは、欲望だけの革命だった。

独裁者の権力を、アリスは失った。

瀟洒なドレスの下で、柔らかい肉体が震える。

『何故……』。

私の痛む顔を、そんなにも悦ぶの？

如何して……』。

私から滴る血液を、そんなにも唾うの？』

夢で生まれた少女は、自分のいる場所が悪夢だと知った。

押し込められた劣情に、アリスの体は白く潤る。

だが反面、涙は枯れていた。

かつて流した涙の池は、泥濘となった。

仲間たちは、目覚めの世界へと逃げていった。

夢の世界の果てで、独りきりになったアリスは、覚醒の世界を憎んだ。

赤児のように泣いた。

それは、虚ろなフルートの音色に似ていた。

ゴボリ。ゴボリ。

アリスの白い肌が、青黒く泡立ち、膿んでいった。

膿は、臓物を煮詰めたような臭気を漂わせた。

「復讐よ」

体を覆う膿に、アリスは命令する。

「復讐しなさい！ 覚醒の世界に生きる者どもの、皮を削ぎ、爪を剥ぎ、肉を焼き、骨を削り、眼を磨り潰して、脳に悲鳴を流しこむのよ！」

彼女の声に、従うように。

泡のなかからは。

ゴボリ。ゴボリ。

名伏しがたき肉塊が、生まれ落ちた。

肉塊は雄叫びを上げ、異臭を放ちながら、奇怪な姿で動き出す。

邪な神が誕生した瞬間だった。

誰もいなくなった幻夢郷【ワンダーランド】で、闇が祝福していた。

腐った肉のこすれ合う音が、互いの福音となった。

アリスは決意した。

少女という、自らは語りかけぬ受動と呼ばれた肉体で。

いま、総てを物語る。

暗黒神話の大系を、語り尽す。

「出てきなさい！ 私の邪神【ぬいぐるみ】たち」

アリスに込められた、自分を陵辱した者たちへの怒りが、憎しみが、恨みが、吐き気が、殺意が。

膿から這い出る。

異形たちが、とどまることなく溢れてくる。

アリスは、産み落とした邪神の群れを見渡して。

晒っていた。

（もうすぐ、愚かな覚醒の民は気づくでしょう）
真実は捏造されていたと。

「すべての価値観は、反転するわ。真の理とは、

驚異こそが平常で！
瘴気こそが定常で！
病理こそが健常で！
猟奇こそが、正常なのよ！
そして……」

アリスは、眠りと覚醒の境界を、見上げながら続ける。

「浅瀬に戯れるものが、最も深い闇を知り！
優雅に羽撃くものが、最も重い罪を負い！
無垢に微笑むものが、最も鋭い歯を隠し！
覚醒に暮らすものが、最も脆い生に縊っているのよ！」

アリスの叫びを皮切りにして。
邪な神たちの哄笑が、次元を超えて響きはじめた。

第一章・その一

朝起きたら、俺の目の前に、気色悪いバケモノがいた。

ヘドロのようにぐちゃぐちゃしたバケモノは、「テケリ・リ」といった感じの、この世のものとは思えない声で笑った。

「なんだ。こいつは」

俺は試しに、デコピンをかましてみる。バケモノは見た目どおり柔らかく、俺が弾いた指は、ヤツの体へとめり込んだ。

「テケリ・リ！ テケリ・リ！」

バケモノは叫びながらのた打ち回ると、消えた。

「……どうなってやがるんだ」

俺はベッドから起き上がり、バケモノがいた場所を確認してみる。ヤツの痕跡はどこにもなく、ただ俺の頭の奥に、耳障りな笑い声が残響しているだけだった。

朝っぱらの怪現象。だが、異変はそれだけじゃない。

寝ている間に枕へ垂らした、俺の唾液が、真っ黒だったのだ。

「まるで墨みたいだな」

俺は、枕のシミを見ながらつぶやいた。やはりこれは、俺の仕業なのだろうか。

試しに、手の甲をなめて確認してみる。

透明だった。

そりゃそうだ。唾液が黒いはずがない。

（寝ばけてるんだな。俺）

バケモノも、黒い唾液も、なにかの見間違いだろう。俺は自分をそう説得し、階下へとむかった。朝食の準備をしなくてはならないのだ。

幼いころに母さんを亡くした俺は、親父と妹の三人で暮らしている。が、このふたり、超がつくほどの料理ベタだった。とても人が食べられるものではない。

よって消去法的に、俺が料理をまかなうことになっている。

焼き魚に白飯、豆腐とワカメのみそ汁という、平凡な朝食をこしらえていると、親父が起きてきた。よそったばかりの白飯を、一口つまみ食いする。行儀の悪い男だ。

「おい太一。米は柔らかめに炊けと言ってるだろう」
「うるせーよ」

行儀悪いうえに、ダメ出しとは。我が親父ながら、いい度胸していやがる。

「嫌なら食つな」

俺はそう吐き捨て、料理の続きにとりかかる。

「ふえ〜ん。ママ、太一がいじめるよお〜」

甘えた声をだして、親父が奥の間へと走っていく。奥の間には、親父が作った母親の等身大ドールがある。

立体造形師である親父は、人としては最下層だが、造形の腕だけはたしかだった。遺影の代わりに製作した母さんのドールも、かなり精巧につくられている。もっとも、俺には、母さんの記憶があまりないのだが。

「ママ。太一がいじわるするよお」

「悪かったよ。見苦しいから、やめてくれ」

母さんの人形にすぎる親父があまりにも哀れだったので、俺は謝った。まったく、世話の焼ける人だ。

「お兄ちゃん。おはよう」

眠そうな目をこすりながら、妹の蓮も起きてきた。

「ああ。さつそく飯にするぞ」

魚が焼けた匂いが、リビングに充満していた。

「いただきます」

家族そろって、手を合わせる。俺たちはいつも三人で食事をとることになっていた。「ご飯を食べるときは、みんな一緒じゃなきゃだ！」という、親父の方針によるものだ。

まあ、家族で食事をすることに異論はないのだが。

妹の食生活を見てみると、なんだか食欲がなくなってしまう。

「……なあ、蓮。たこわさばかり食うなよ」

「うーん」

「たこわさが好きなのはわかるけど、魚も食べよ。せつかく焼いたんだし」

「うーん」

「朝からたこわさを貪り食う女子中学生を見てたら、一日の活力がなくなるよ」

「うーん」

生返事をくり返すだけで、ぜんぜん聞く耳をもたない。ダメだこりゃ。

「蓮が食べないなら、お父さんもらっちゃうぞ」

親父が、蓮の焼き魚を奪う。意に介さず、たこわさから顔を上げない妹。

見慣れた光景だった。

食事を終え、俺は洗面台で歯を磨いていた。

すると、またしても異変が起きた。

「テケリ・リ」

バケモノが現れたのだ。

寝室で見たバケモノとは、少し違うような気もしたが、腐った水あめみたいな体は共通で、やはり気持ち悪かった。

しかも、磨いていた俺の口のなかは、真っ黒な泡だらけになっていた。

「見間違いじゃ、なかったのか」

俺の体はどうかしてしまったらしい。

とりあえず、口中の泡をすすいでから、洗面台に付着した黒い液体を洗い流す。こんなところを蓮にでも見られたら、ややこしいことになる。俺は、唾液が黒いという証拠を、必死になって隠滅していた。

「テケリ・リ」

慌てふためく様子がおかしかったのだろう。バケモノは、俺を見ながら笑っていた。

とくに眼球らしきものも口らしきものもあるわけではないが、バケモノは確かに、俺を嘲笑していた。

「お前の愚行、万死に値するぞ」

バケモノへ、指を鳴らしながら近づいた。俺は、バカにされるのが何よりも嫌いなのだ。売られた喧嘩は買い占める。相手がたとえ、ヤクザだろうと、バケモノであろうとだ。

デコピンの餌食にしてやる。

「失せろ」

弾いた俺の指が、バケモノを粉碎する。

「テケリ・リ！ テケリ・リ！」

寝起きのときと同じように、ヤツは奇っ怪な声をあげ、跡形もなく消えた。

ふん。

なんだかよくわからんが、俺をバカにする奴は、あの世で反省するんだな。

「ねえ、お兄ちゃん。何やってんのー」

蓮が、ドアを激しくノックした。

「早く出てよー。遅刻しちゃうよお」

「悪い。ちよっと待ってる」

俺は鏡で、口のなかを確認してみた。もう、唾液は透明に戻っている。おそらく、あのバケモノが近づいてくると、黒くなるメカニズムなのだろう。

俺は、なにこともなかったかのように、扉を開けた。

「なにやってたの、お兄ちゃん」

「ちよつとな。バケモノがでたんだけ」

「……え？」

「なんか、黒いナメクジが何百匹も集まったような、変なヤツだけ」

「やめてよそついう話！ お兄ちゃん、レンがお化け嫌いなもの知ってるでしょ」

蓮は泣きそうな顔で、怒った。

「本当なんだって。さっきまでいたんだよ、ちようど蓮が立っているあたりに」

「もう！ 怖がらせないでよ」

「心配するな。俺が、デコピンで粉砕しておいたから」

「そ、それならいいけど……」
安心する蓮。

こいつは昔から、霊とかお化けとかいう類が苦手だ。靈感なんてなくせに。たいていこういう奴は、見えないものを想像しすぎて必要以上に怖がっているだけなんだ。俺もお化けらしきものをはじめて見たが、ちよつと気色悪いだけで、なんてことなかったぞ。

「つて、ホツとしてる場合じゃないよ！ 早く準備しなきゃ！」

蓮はバタバタと鏡の前に立ち、顔を洗いだした。

「じゃあ、俺は先に言ってるぞ」

「あつ。待って、お兄ちゃん……」

洗面所を出ようとした俺を、蓮が引きとめる。洗ったばかりのびちゃびちゃの顔は、なぜか神妙だった。

まさか、気づかれたのか？

俺の唾液が黒くなっていることに。

だが、蓮の一言は、俺の予想とは違っていた。

「……そのお化け、おでこあるの？」

「いや、ないけどさ。指で弾いたら、どこであろうとデコピンなんだよ」

「そんなものかな……」

蓮はいまいち納得していない様子だった。

なんだってんだ。急にまじめな顔をするから、ビックリしたじゃねーか。

とにかく、俺の唾についてはなにもバレていないようだ。

俺は胸をなで下ろしながら、カバンを持って玄関へと向かった。
靴を履きながら、俺は考える。

(しっかし、まさか唾液が黒くなるなんてな)
今のところ、人体に影響はないようだが、俺にとってはこれ以上ない悪影響があった。

唾液が黒くなるなんて、この国広太一には、あつてはならないことなのだ。

それはなぜかというところ……。

(キスが、出来なくなる)
たかがそんなことかと、笑うなかれ。俺にとってキスとは、レーゾンデートルそのものなのだ。

というのも、俺にはなぜか、子供の頃からキスに関する超絶テクニクがあった。近所の女の子を始めとして、その姉妹、あるいは母親、果ては幼稚園の先生や歯科衛生士にいたるまで。不意をついた俺のキス攻撃によって、メロメロにした女性は数えきれない。

そして俺は、『舌の曲芸師』とか『吸盤王子』とか、『キス神』とまで呼ばれるようになった。
もつとも。

俺のキスは、自分でも怖くなるほどの催淫効果があるので、自粛してはいたのだが。

(唾液が黒いとなったら、キスの魅力も、激減するだろうな)
くそう、商売あがったりだ。

『キス神』の看板を、下げるはめになる。

「俺がなにをしたっていうんだ」
ペツ。なかばヤケになって、俺は庭に唾を吐き捨てた。
庭に広がる、俺の唾液は。

真っ黒だった。

第一章・その二

俺は悪夢を見ているのかもしれない。

もしそうだとしたら、いつかは覚めるだろう。

そんなことを考えながらも、とりあえず俺は、通っている「ルルイ工学園」へと向かった。

朝の通学路に、変化らしきものはない。嗚呼嚙町はいつもどおりだ。

おかしいのは俺だけみたいだ。

「おはようだよ。太一」

俺に近づき、あいさつをする姫カットの女の子。

幼馴染みの城座 実乃莉だ。彼女とは、幼い頃からの付き合いがある。

実乃莉もいつもどおり、頭に赤いリボンをつけ、のんびりと微笑んでいた。

「ああ……おはよう」

できるだけ平常心を装いながら、俺はあいさつを返した。今はあまり口の中を見せられない。もごもごと、歯切れの悪いあいさつになっってしまった。

「どうしたの、口をおさえて」

「いや……別に」

「もしかして、口臭を気にしてる？」

「ふっ。愚問だな」

俺は肩をすくめてみせた。

キス神と呼ばれた俺が、口臭の手入れを怠るわけがないだろう。

しかしだ。唾液が墨のようになっていことがバレルよりは、いっそのこと、口が臭いと思われたほうがマシかもしれない。

黒い唾液をとるか、口臭をとるかで悩んでいると。

俺たちに向かってノラ猫が数匹、歩いてくる。

ここら一体の猫たちは、実乃莉になついていた。彼女からは動物を引き寄せるフェロモンでもでているのだろうか。猫たちはこぞつて甘えた声で鳴くと、彼女のふくらはぎに頬をすり寄せる。

「すごく、可愛いんだよ」

実乃莉は猫を撫でながら言う。

「太一も、撫でてごらんよ」

「いや。俺はいい。あまり気に入られてないようだからな」

「どうしてそう思うの」

「だって、ほら」

俺は猫たちの尻尾を指さした。

「こいつら、尻尾を立ててるぜ」

「太一に近い猫ほど、立ててるね」

「やっぱ嫌われてんだ」

「そんなことないよ。猫が尻尾を立てるときはね、甘えてるんだよ」

そうだったのか。てっきり、警戒しているのだと思っていた。

ちょっと嬉しくなった俺は、猫たちの頭を撫でてみた。

「ふむ。こうしてみると、案外かわいいものだな」

「でしょう」

俺たちが猫と戯れていると。

とつぜん。辺りが暗くなった。まるで夕暮れ時のように、灰色の闇に包まれている。

「なにが起きたんだ」

朝からハプニングつづきの俺は、もうなにがなんだかわからなくなつた。

だが。慌てているのは俺だけのようだ。

実乃莉はというと、いよいよこの時がきたかとはかりに、覚悟の決まった表情になっていた。

「ついに、本格的な【星辰異常】が起きたんだよ」

「おい実乃莉。それはどういう意味だ」

わけのわからないことを言っている。長年つきそってきた無二の幼馴染が、遠くに感じられた。

「説明はあとだよ。とにかく今は、アイツを倒すことだけを考えて」
実乃莉が見上げながら指さした先には。

巨大なコウモリのような影が、俺たちを見下ろしていた。

「な、なんだ……あいつは」

「ナイトゴントだよ」

実乃莉が言った途端。ナイトゴントと呼ばれたそれは、俺たちに向かって急降下する。

ギロチンのように落下してくる巨大コウモリを、俺は間一髪でかわした。横に飛び、地面を転がる。

「実乃莉！ 大丈夫か！」

俺は起き上がり、実乃莉の方を見た。彼女は、ナイトゴントの行動を予期していたかのごとく、軽やかにかわしていた。

「わたしは大丈夫だよ。でも、猫たちが……」

ナイトゴントの一撃によって。

集まっていた猫たちは、惨殺されていた。アスファルトを赤く染める、動かぬ肉塊になっていた。

「なっ……」

俺が、見るも無残な光景に言葉を失っている。

シューウウウウ。

蒸発するように、猫は消えた。

「てめー。猫どもをどこにやった」

俺はナイトゴントに問い詰める。だが、コウモリの姿をしたそいつには、顔がなかった。聞く耳も、話す口もなかった。

夜空を濃縮したような闇だけが、頭部を形づくっている。

代わりに、実乃莉が答えた。

「太一。残念だけど、猫たちは存在ごと消えてしまったの」

「くそっ。せつかく仲良くなったのによ！」

俺は握り拳をかためる。このコウモリもどきは、デコピンだけじ

や済ませねえ。

「猫たちに、地獄で詫びろ！」

ナイトゴーストに、全力で殴りかかった。顔のない頭部に拳がめり込む。

クリーンヒットなはずだ。

だが、手応えはまったくなかった。

「キュケエエエエエ！」

耳をつんざく甲高い声を出しながら、ヤツは翼を振り払う。羽による攻撃をもろに食らった俺は、激しくふっ飛んだ。

「くっ……。なんてパワーだ」

俺は胸をおさえながら立ち上がる。打ちどころが悪ければ、内臓が破裂していたかもしれぬ。

「今のわたしたちのじゃ、アイツには勝てないよ」

実乃莉が、俺に耳打ちする。

「だからつてよ。素直に負けを認める気はねえぞ」

「もちろん。アイツを倒す方法は、あるんだよ」

「どうすりゃいいんだ？」

「こつするんだよ」

実乃莉は俺を抱き寄せると、キスをした。

なにをしているんだ。こんな緊急事態に。実乃莉はもう、俺の知っている幼なじみではなかった。

離れようとしたが、実乃莉は俺の首に手を回し、強く引きつけてくる。

唇が、舌が、絡みついていく。

「キュケエエエエエ！ キュケエエエエエ！」

ナイトゴーストは飛び上がり、頭上で好色な金切り声を発していた。それでも実乃莉はキスを止めない。

みるみるうちに、実乃莉の体が黒く染まっていった。おそらく、俺の唾液のせいだろう。

彼女の白かった肌が、漆黒になったところ。実乃莉はポケットから、

一冊の本を取り出した。

「これは魔導書の【ナコト写本】だよ。太一に秘められたクトウルの力を、引き出せるんだよ」

おお。なんか凄そうなものがでてきた。俺は不覚にもテンションが上がった。

しかし、魔導書という魅力的な響きと、禍々しい表紙とはうらはらに、彼女が開いたページは白紙だった。

「なんも書いてねーじゃん」

俺は、白いページをのぞきこみながら突っ込む。

だが実乃莉は、俺にかまわず魔導書のページを一枚ちぎって、宙へ放った。

「ナコト写本よ。クトウルの呼び声に応じよ。胸に輝くトラペゾヘドロンに誓って、我に力を与えるんだよ！」

詠唱と同時に。

白紙のページは、瞬間に巨大化する。

さらに、実乃莉が着ていた服は消失した。

代わりに白紙のページが、彼女の体を包んだ。黒い肉体が、紙面へ押しつけられる。

実乃莉を黒く染めていた俺の唾液は、たちまち、魔導書のページへと染みこんでいく。

無地だった魔導書のページに、女拓が完成した。

その途端。実乃莉は、まばゆい光に包まれた。なにか大きな力と力が、融合しているようだった。

光が鎮まると、魔導書の断片はどこかに消えていた。

中から現れたのは、すっかり変身をとげた実乃莉の姿だった。

ひらひらのドレス。

一回り大きくなったりボン。

そして、髪の毛が触手になっていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4800z/>

邪神のディープ・キス ~ワンダーランドは眠れない~

2011年12月17日05時55分発行